大賞 ［高校生の部］

実体験に基づく問題意識を全世界的な視点、具体的提案に展開。未来を見据えた高校生らしいまっすぐな姿勢と、論文としての完成度の高さが評価されました。

だれもが国境を軽々と越えていく社会
――必修教科「グローバル・コミュニケーション科」の創設

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校 2年
木田 夕菜 きだ ゆうな

上海に向かう機内の私は正直あまり気乗りしていなかった。初めて上海を訪れたのは2年前だった。近代的な上海の都市は眼を見張るものばかりだったが、観光地をめぐる旅は、日本語が通じない不自由さと、文化や習慣の違いに戸惑い、帰ってきた私は疲労困憊だった。今年の3月、私は再度、上海を訪れる機会を得た。しかし、前回の経験と近年の日中間の問題による不安も重なり、私の心は決して明るいものではなく、2年ぶりの近代的な空港の景色も私の心を弾ませてはくれなかった。

今回の研修のプログラムには現地の高校生との交流が組まれていた。交流を翌日に控えたホテルで、私を含めて青森や神奈川から参加した4人は、意図的にその不安を口に出さずにいたが、不安と緊張が入り混じった何とも言えない雰囲気の中にいた。しかしながら、私たちのその不安は呆気なく払拭された。私たちを迎えてくれた美術コースで学ぶ高校生たちは、まるで同じクラスメートを案内する時のように自然に話しかけてきた。彼らは伝統工芸である「中国結び」の作り方を熱心に教えてくれた。正直、それは難しく簡単にできるものではなかったが、その高校生は英語とわずかな日本語を交えながら、丁寧に何度も教えてくれた。

「中国の高校生も、小さい頃から、みんな日

本のアニメ大好きですよ。」

彼がふと呟いたその一言に私たちは驚いた。すると一人の女子高生が、自分の携帯を開き、その待受画面の写真を見せてくれた。そこには、日本のアニメキャラクターに扮した彼女の姿が写っていた。それを見た私たちは、感嘆の声をあげると同時に、瞬間的に彼女たちとの距離が縮まった感覚を覚えた。

テレビの画面や観光バスの車窓からでは決して見えない上海の人々の様子がここにある。

私は思った。テレビカメラのファインダーを通して見ていた中国は、あくまでもこの国のほんの一部分をデフォルメして映したものでしかないのではないか。共に食事をし、歩き、そして私の片言の英語を一生懸命聞き取ろうとしてくれた同世代の彼らは、間違いなく話す言語や文化こそ異なるものの、私のクラスメートと何一つ変わらぬ気さくで優しい人々だった。

先日発表された調査で、日中双方とも相手の国によい印象をもっていないと答えた割合が9割を超えていた。しかし相手の国に行ったことがある人は日本には15%、中国では3%しかいないのだ。つまり相手のことをよく知らないまま、ほとんどの人々が、相手の国に対して悪印象をもっていることになる。

国連のユネスコ憲章の前文は次の書き出しで始まっている。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。」

メディアで、伝聞で繰り返し伝えられる固定化されたイメージやステレオタイプの表現だけでは、隣国の姿を正しく見ることはできないのだ。実際にその国の人々と互いに向き合い、会話をし、ふれ合うことでしか見えないことがある。

私は提案したい。それは、国連加盟国全ての教育制度の初等中等教育から高等教育にわたる全てに課する必修科目「グローバル・コミュニケーション科」の創設である。この新教科の理念は「国際交流」と「相互理解」である。したがって教科のカリキュラムは、人的交流をメインとした「国際交流活動」となる。実際のプログラムでは、国連及び国家の財政的支援により、近隣諸国を中心に定期的な交換留学を可能にし、その生徒たちとの交流を全ての生徒が繰り返し行うことができるようにする。そしてそこでは、共に何かを作り上げることを目的とした協働学習を中心とし、決して儀礼的な活動に終わらないように注意する。つまり協力し合う、理解し合う経験を重ねることに意味がある。

また、この活動と並行して、教育の場に整備されつつあるICTを活用し、多様な国々をインターネットのテレビ電話でつないだ交流活動も行う。そしてそれは国連総会において採択された「平和の文化に対する行動計画」にも示されているように、多様な国の、多様な民族の人々と接し、不要な先入観や差別意識を排するためにも、なるべく初等教育の時期から、段階的に行うようにする。

次に授業では、全ての国でユネスコか国際的な第三者機関が作成する「国際教科書」を使用する。人間は、互いに共有できるものを見つけた時に、一気に親近感が湧く。だからこそ、同じ教材を使用して学習する意味がある。そして、その教材の中には「地球的世界史」を取り入れる。勿論、各国が編纂する教科書を使った自国の「歴史」の時間があってよい。そして両者の教科書の表記が異なっていてもよいのだ。なぜならば、子どもたちはそのことで歴史は決して一つではなく、多様な見方があることを学ぶことができるからだ。

そして、英語教育の充実を図る。それは、言語の異なる人同士が理解し合うためには、どうしても互いの考えを正確に伝えられることが大切なのだ。私は、上海で出会った高校生たちと、もっとちゃんと語り合いたい、もっときちんと気持ちを伝えたいと思った。しかし、私の未熟な英語能力ではそれは適わず、ただ歯がゆい思いをするだけだった。多様な国家の多様な民族同士が、理解し合うためには、互いが互いの心の内を説明するためのツールは全員がもっていなければならない。

地上400km上空を回る国際宇宙ステーションでは、様々な国家の宇宙飛行士が共同で生活しながら、地上とは隔絶された閉鎖的な空間の中で作業を行っている。ここでは、文化や習慣の違いを超えて、一つの目的のもとに互いが協力し合うことが求められる。彼らが宇宙ステーションの窓から覗く本物の地球には国境線など引かれていない。「グローバル・コミュケーション科」における卒業単位には、これと似たような経験を課すことも考えられる。

私が望む「わくわく社会」は、だれもがためらいなく国境を越えていける社会である。異なる国家、異なる民族の人々と何の抵抗もなく手を取り合える社会である。そのためには、子どもの頃から身につけた異なる文化や習慣をもつ人々への理解と寛容さ、そして異なるものをより深く知りたいという旺盛な好奇心を、リュックサックいっぱいに詰めていけるようにしたいのだ。国家間には、容易には解決困難な問題は常に存在しうる。これらを解決するための最後の、そして最悪の手段である「戦争」を水際で踏みとどまらせるのは、当事国の人々の間に生まれた相互理解と、それに基づく確かな絆なのではないだろうか。

私が見た最高層のビルの展望台から見下

ろす上海の摩天楼は、決して異質な文化の土壌の上に建てられたものではなかった。それは紛れもなく私たちの住む街と海を隔てながらもつながっている。

上海の彼らと一緒に編んだ、赤い光沢のある柔らかな紐で織り込まれた「中国結び」のマスコット。それは今でも、部屋の窓をあける度、机の上で楽しげに揺れている。大陸から吹いてくるあたたかな西風を受けながら。

参考文献

・言論NPO「第9回日中共同世論調査」
http://www.genron-npo.net/world/genre/tokyobeijing/post-240.html
・「ユネスコ憲章」
http://www.mext.go.jp/unesco/009/001.htm
・「平和の文化に対する行動計画」
国連総会決議　53/243(1999年9月13日)